

たゆまぬ努力で

もとおりのりなが 本居宣長

本居宣長は、1730（享保15）年5月7日、松阪本町の江戸店持ち商人、小津定利の子供として生まれました。11歳のとき、父が江戸で病気のためなくなり、この後、宣長を含む家族5人は、魚町に移り住みました。商いがあまり得意でなかった宣長は、23歳のとき、母の勧めもあり医者になろうと京都へ旅立ちます。京都では、医学書を読むために、まず儒学を学び、次に医学を学びます。またひとりで、日本の古典や和歌も勉強しました。

28歳で松阪に帰り医者を開業した宣長は、そのかたわら松阪の歌会に参加し、会員たちに『源氏物語』を講義しました。そんな中で宣長は、歌や『源氏物語』が人を感動させる秘密は、人は「もののあはれを知る」心を持っているからだと考えました。「もののあはれ」とは、嬉しいこと、悲しいこと、また四季の移り変わりなど、物の変化に敏感に揺れ動く心があります。（当時、特に男性は、冷静沈着でなければならないとされていました。）ここに日本人の心の特徴があると考えた宣長は、それを証明しようと、現存最古の歴史書『古事記』（712年成立）の解説を思い立ちます。

ところが、漢字ばかりで書かれた『古事記』は難しく歯が立ちません。自分の勉強不足を痛感する宣長の前に現れたのが、江戸の国学者・賀茂真淵でした。国学とは、日本固有の文化や思想を、古典や歴史、また言葉の研究で明らかにする学問です。

1763（宝暦13）年5月25日、真淵が泊まっていた松阪の旅館新上屋を訪ねた宣長に、真淵は、『古事記』に注目したことは素晴らしいとほめて、「難解なこの本を読むためには、まず『万葉集』から勉強をなさい。学問は基礎が大事だ。」と丁寧に説き諭し、わからないことは手紙で質問し

こ ん な ん 困難をのりこえる

てくれれば答えてあげようと約束してくれます。「松阪の一夜」とよばれるこのただ一度の出会いを機に宣長は真淵の弟子となり、その厳しい指導を受けながら、『古事記』の注釈書『古事記伝』の執筆に取りかかったのです。

『古事記』の冒頭の「天地」という字はどのように読むのか。古代の人は「神」をどんなふう考えていたのか。『古事記』に登場するイルカ、クラゲ、またタニグクとはどんな生きものか。次々に出てくる疑問を一つ一つ丁寧に、時には街道を往き来する旅人の知恵を借りながら、解明していったのです。

努力が実り『古事記伝』全44巻が完成したのは、69歳の夏でした。執筆開始から35年がたっていました。21世紀になった現在でも本書は、『古事記』を読む時の基本書として、また日本古典研究の方法を確立した書として、高く評価されています。

宣長は、鈴と山桜をこよなく愛しました。研究で疲れたとき、鈴の音を楽しむことで心を癒し、自宅の二階の書斎を鈴屋と名付けました。（後に、宣長の家そのものを言うようになりました。）この建物は松阪市殿町の松阪公園内に移築されていて、本居宣長記念館の横にあり、見学することができます。また、山室山にある奥墓には、山桜が植えられています。



本居宣長六十一歳自画自賛像
(本居宣長記念館提供)

学習のめあて

本居宣長は、京都で医者になるための勉強をする中で、たくさんの人の教えを受けながら、興味のあることに出会いました。故郷に戻ってから、医者を開業するかたわら、京都で学習した古典を人々に伝えていました。そこで、日本人の心の特徴を知ろうと『古事記』の研究に取りかかりました。『古事記』とは、今から約1300年前にまとめられた、現在伝わっているなかで一番古い日本の歴史書です。宣長は、『古事記』の最初にある、二字の漢字の読みを調べるのに5年近くもかかりました。そうした努力の末に、35年かけて『古事記伝』を完成することができました。

本居宣長は、なぜこれほどの長い期間をかけて『古事記』を研究しようとしたのでしょうか。国学の研究者である賀茂真淵との出会いや宣長の著した『うひ山ぶみ』を参考にして、宣長の学問に対する考え方や姿勢について考え、話し合ってみましょう。

また、これまでの自分の取り組みを振り返り、これからの生活でめざしたい夢や目標の実現に向けてどう取り組んだらよいか考えてみましょう。

考えてみよう

- 1 本居宣長が研究した『古事記』とは、どのような本でしょうか。
 - 2 本居宣長はどのようにして35年という長い間、難しい『古事記』の解説に立ち向かったのでしょうか。
 - 3 賀茂真淵は、本居宣長と初めて松阪で会ったとき、宣長に『古事記』の研究についてどのように話したのでしょうか。
 - 4 本居宣長は学問についてどのような考え方をもっていたのでしょうか。資料の『うひ山ぶみ』を読んで考えてみましょう。
 - 5 自分のこれまでの生活を振り返り、自分で立てた目標をやりとげた経験について話し合ってみましょう。
 - 6 夢や目標を実現するためには何が必要か、考えてみましょう。
- ☆ 第1部の「夢に届くまでのステップがある(P16~19)」を活用し、夢や目標を持ち、その実現に向かって努力することの大切さや難しさについて考えてみましょう。

「松阪の一夜」

宣長は真淵先生に

「『古事記』の研究をしたいと思っております。それについて何かご注意をくださることはございませんか。」

と話しました。すると、真淵はこう語りました。

「それはよいところにお気づきです。私も実は早くから『古事記』を研究したい考えはあったのですが、それには、『万葉集』を調べておくことが大切だと思って、その方の研究に取りかかったのです。ところが、いつの間にか年をとってしまって、『古事記』に手をのばすことができなくなりました。あなたはまだお若いから、しっかり努力なさったら、きっとこの研究を大成することができましょう。ただ注意しなければならないのは、順序正しく進むということです。これは、学問の研究には特に必要ですから、まず土台を作って、それから一步一步高く登り、最後の目的を達するようになさい。」

宣長が真淵に会ったのは、生涯のうちこの一度だけでした。しかし、宣長はこの時の真淵の教えを忠実に守り、35年の間努力に努力を続けて、ついに『古事記』の研究を大成しました。有名な『古事記伝』という大著述は、この研究の結果です。今から250余年前の5月25日の夜、新上屋の行灯は、その光の下に語った老学者と若者を照らしました。しかも、そのほの暗い灯火は、わが国の学問の上に不滅の光を放っています。

〔本居宣長 郷土の偉人を知る①〕(松阪市教育委員会)から作成

● 『うひ山ぶみ』の一部より

「学問というのは、ただ年月長く倦ず怠らず、励み努めること。つまり継続が大事で、方法はいた問題ではない。どれだけ方法が立派でも、怠けて努力しなければ、成果を得ることは出来ない。また、才能の有無無しで、成果に差は出てくるが、才能の有無は生まれつきのことだから、人の力ではどうにもならない。ただほとんどの場合、才能のない人であっても、怠けないで努力すれば、それだけの成果はあるものだ。また、学び始めるのが遅かった人でも、努力すれば、予想を上回る成果を上げることもある。忙しい人も、かえって暇な人よりも成果を上げることがあるものだ。結局は、才能がないとか、学び始めるのが遅いからとか、忙しいと理由をつけてあきらめてはいけない。とにもかくにも一生懸命努力すれば、出来るものだと考えたほうがいい。何でも途中で断念するのは学問の大敵である。」

『うひ山ぶみ』(現代語訳)

(※『うひ山ぶみ』…本居宣長が研究の心構えや態度についてわかりやすく著した国学の入門書)

「宣長ってどんなひと?」(公益財団法人 鈴屋遺蹟保存会 本居宣長記念館)、ほかから作成